
遊 戲 王F

河持 翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊 戲 王 F

【Zコード】

Z5140X

【作者名】

河持 翔

【あらすじ】

異なる時間、異なる歴史、異なる物語の始まり…。

まず初めに

……崩壊する景色、失われていく理想郷、……あの日、世界は墮ちた。
……どうもはじめまして、うっすら主です。この小説は私の処女作となるものです。文章の稚拙さが目立つと思いますが、そういうふたものも含めて最後まで読んでくれたら幸いです。小説内では、多数のオリジナルキャラクター、オリジナルカードが登場する予定です。また読者からのアイデアも積極的に取り入れていきたいとも思っています。また当作品では一部過激な内容のものも出す予定ですので「」で承ください。

パウトワー 神の消失（前書き）

ここから本編です。

ゴウトウ1 神の消失

side 神の目

デュエルモンスターZ（通称デュエル、I2（インダストリアル・イリュージョン）社より生み出されたこのカードゲームは、瞬く間に世界中に広まり、チェスやトランプ等のメジャーゲームに匹敵する競技人口とワールドカップをもじのぐ人気を集めた。世界規模での大会を行う施設、デュエルモンスターZ専門の学校等様々デュエルに関する建物が建設された。デュエルは人々の歴史に大きく、そして新たなページを書いたのである。

しかし、そんなデュエルに誰もが予期せぬ事態が起きた。

20XX 8月上旬、I2社本社が突如謎の爆発を起こし、崩落した。

日本、アジアの中でも中国、インドと肩を並べる経済力を持つたこの国とのある港町、太平洋に面しており国外から様々な物資が行きかうこの町では現在通勤ラッシュの真っ只中だ。現在の時刻は8時10分、この町で最も激しい時間帯だ。港からおよそ800m離れた駅では、駆け込み乗車は〜とか、降りる人を〜等と駅員の声がスピーカーを通して常に鳴り響いている。騒がしいといえばそれまでになるが平和?な日々だ。

駅から少し離れたところには中学校がある。波風第五中学校、生徒数461人クラスは1年A組、1年B組とアルファベットで数え、

毎年学園祭や体育祭を開き、時々地域に貢献した運動もする「」くありふれた公立の学校である。そんな学校の正門からはなんというか右手で竹刀を持ち、黒のジャージを来たなんとも古典的なこわもて顔の体育教師が、オラア、もうすぐ予鈴がなるぞ……つとどなつていた。周りの生徒は小走りで校内へと入つていった。そんな周りがあわてている中、唯一人、学校指定の鞄を右肩で担ぎ、制服である学ランの上2つのボタンをあけ、目を半開きにし下を向いたまゆっくりと歩く少年がいた。

「オイ! そこのお前、なにちんたら歩いてるーさつさと教室に行け

エー!」

「…ああ、わかりました」

少年は少し間をあけてから、体育教師を睨みそういった。

「ツチ、なんなんだアイツ」

体育教師は吐き捨てるようにいった。

4月下旬の現在、今年入学した1年生はそのほとんどが自分たちの入部する部活を決めており、すでに入部希望の用紙を提出した者も少なくはない。そんな1年生の教室の一つである1年A組の町の景色が見渡せる窓のすぐ側の席で先ほどの少年は本を読んでいた。

「…」

そんな少年に三人の少女が近づいていた。

「クスウ……たりでいる」

「ツソ……チ……友……いないの」

「ボツ……とか」

少年は三人の言葉を聴いてはいるが無視した。やがてしばらくすると少年は本を閉じそれを鞄に入れると少年はうつぶせになつた。無視無視、そう自分に言い聞かせた、と次の瞬間、

「ウエエエエイ」

3人のうち目が小さく垂れ下がり学校指定のミニスカートの下に体操服である短パンをはいた少女が奇声をはつすると同時にもう一人

の本来なら校則違反であるが髪を暗い金色にブリーチした少女が先ほど自分が読んでいた本を鞄からぬきとつた。

「ウエニエニ」

「Foooooooooooooo」

猿のようなポーズと奇声を発している少女たちに少年は低い声で叫んだ！

「おい！ふざけんじやねえよ、クズども！」

するとスパツツの少女はこういった。

「オイ、フザケンジヤネエヨ、クズドモオオオ」

「オオオオアアアハアアア」

少年の言つたことほ復唱すると再びキチガイじみた声をあげ叫びだした。

「オイ、つむれこお前ら、何やつてる、とつとと席に着け！」

すると少年たちの担任である30代後半の女教師が若干ドスのきいた声で言いながら教室に入ってきた。三人の少女は本を少年の机に置き、女教師に、いえ別に虚淵君と遊んでただけです、とでたらめなことについて自分たちの席に座つた。

side 虚淵

俺の名前は虚淵玄、某脚本家と同じ名前だが気にしないでくれ、親が某魔法少女アニメのファンだったらしいし偶然苗字が一緒で付けたらしい。「らしい」というのは俺の両親は昔とある事故で死んでいるからだ。俺もそのとき左腕を失つた、だからあまりそういう件については、俺も詳しくない。

side 神の田

午後4時過ぎ、1年生は授業が終わり部活に入つていないものはそのままどんづが帰宅する時間だ。虚淵も特にそういうものには入

つていないので今は学校からおよそ500mはなれた自宅に帰るところだ。現在虚淵は働く年ではないので親戚からのお金で一人で暮らしている。今日学校であつたことに腹を立てながら不機嫌そうに歩いていた。つとそんな時ふとコーヒーが飲みたいと思った虚淵はポケットに入れていた財布を手に自販機をさがした。するとすぐにそれは見つかりそこへ硬貨を入れようとした、が、手が滑ったのか硬貨を落としてしまいその硬貨は運悪く自販機の下に転がり込んでしまった。

「あつ ちょっとお

断末魔に似た声をあげながら虚淵は自販機の下に手を入れたが、硬貨はかなり奥の方にいつてしまつたらしい、手では取れないと判断した虚淵は近くにあつた木から枝を一本もぎ取るとそれで奥にいつた硬貨を取ろうとした。虚淵の予想通り枝を使つたことは、正しかつたらしくすぐに硬貨はとれた。

「はあ、よかつたぜ、この前MGガンダムDX買うのに結構使つたからな」

つと安堵の声をあげているともう一つ硬貨とは違う何かがでてきた。

「…？」

それは非常に薄く身長2mあるやつの手にすっぽり収まりそうなサイズのもの、カードだ。それも唯のカードではない。デュエルモンスターズのカードだ。つとそれを見た瞬間ただでさえ不機嫌な虚淵の顔が険しくなつた。例えるのであれば妻を殺した犯人を目の前にした夫のような顔である

「…カード、クソッ 何でこんなD O R E I の産物が…」

虚淵はこれまでにないほどに怒り、カードを破りうとした、が次の瞬間、

凄まじい轟音とともに突如謎の爆発、いやそれに似たなにか衝撃が

ドゴーンッ

おきた。

「うあ」

凄まじい衝撃の煽りをうけ虚淵は5m程吹き飛んだ。

「…いつてえ、なんなんだ」

痛みをこらえあたりを見渡した虚淵は信じられない光景を目の当たりにした。先ほど自分がいたところから少し離れたところにある道がまるで空襲にでもあったかのように抉れていたのだ。町の人々がなんだなんだとあたりを囲む中、爆発の中心に一つ人影が見えた。

「なあタップ、あいつの持つているカードなのか、HATEのカードは？」

「うん、あれへいとのかードだよ、『J-ordin』

「何だつて自販機の下にそんなんのが」

「たぶんこのまえのかぜでとばされた」

「ずいぶんアバウトだなあ」

ゴーデンと呼ばれた男、容姿は金髪碧眼で中肉中背の白人男性だがその顔と目は人の命をなんとも思わない殺人鬼に通じるものがある。そしてもう一方、タップといわれたほう、それをみて虚淵を含め周りの住民たちは驚愕した。身長2mを超える全身毛むくじやらの熊にも似た人いや、化け物がゴーデンと呼ばれた男と話していたのだ。

「おい、そここの坊主、とつととそのカードを渡せえってアイツ英語わかるのかあ？」

「それ、おれたちのかード」

ゴーデンは少々いらだつた声でいうとまるでお菓子をねだる子供のようにタップが続いた。虚淵はそこしれない恐怖と困惑を抱えながら自販機の下から見つけたカードをみた。このカード渡すべきか、でも渡したら最後自分を護るものがなくなる、そうなつたら… そうこう考えているゴーデンがむりにいらだつた口調でひりひり歩いてきながら言つた。

「だから、わたせツツテンダロオ…」

もうダメだつと思つたそのとき…

リンツ

鈴や風鈴にも似た音とともに世界が止まつた。

「…つな、「イツは」

「へいとのけつかい！」

side 虚淵

なんなんだよおこれ、どうなつてんだよお 何で俺こんなやつらに絡まれてるんだよ、それにさつきまでみんなあんなにワーワー騒いでいたのになんでうごかなくなつたんだよ あの一人だつてなんか突然あわてだして、クソ、なんでこんなことに、畜生オ、あの日からなにもいいことなんてねえ

ドゴーン

「うあ……ゴホオ…ゴホオ…」

クソオ、今度は何だつてんだよ

「よおタップ、テメエ何勝手に俺様のカード私物にしてんだあ アー！」

「ゴホ…クソッなんなんだ…うわあ、何だこの化け物は？」

side 神の目

虚淵の前にタップとは違つ別の怪物が現れた。銀と黒をベースとした2mほどの大きさの人型の怪物だ。頭部は蠍螂やクワガタに見えなくもない。

「だぐば、なんでこんなことに」

「テメエにわざわざ時間を割く必要性なんて皆無だ。」

「オイ、テメエら、何俺だけハブしてんだ。タップ、テメエの知り合いか？」この「ゴキブリ」

「ほお 契約者の分際で俺様を「ゴキブリ」呼ばわりとはなあ……ハハハ……ぶち殺す」

3人？とも殺意むき出しで会話をしていると、「ゴーデンそして、ダグバ」と呼ばれた怪物の左腕が光り輝いた。そしてタップが「ゴーデンの腕から放たれる光の渦に巻き込まれ消えた。その瞬間二人の左腕になにかがくついた。「デュエルディスクだ。ソリットビジョンシステム」と呼ばれる立体映像発生装置が内臓されており、ディスクを通してカードに描かれたモンスターたちを作り出す。

「この結果ではデュエル以外のことは一切出来ない、そして負けたものは……死ぬ」

「そんな基礎的な知識見せびらかしてなにドヤ顔してるんだあ、役立たずの専門家ミテエで殺意がでてくるぜ。」

「……ぶち殺す」「デュエル」「デュエル」「デュエル」

side 虚淵

「オイ冗談だろ、なんでこいつらデュエルなんてやつてんだよ。あの銀色の奴はなん？」

「オイ、そこの人間！俺様のカードになんかしたら唯じやおかねえぞ！」

「カードって、この自販機の下にあつたやつか、なんたつてこんなものを……それになんなんだこのカード、見たことないカードだ、確かあいつら……HATEのカードとかいってたな……」

「オイ、きいてんのかあ」「ははい」

「たくうなんであんなやつに。」

第一ターン・ターンプレイヤー・ゴードン L.P.・800
0 手札・5

「先行は俺がもうつ、ドロー、俺は《切り込み隊長》を召喚！」
中年の剣を持った戦士がゴードンの声にこたえるかのように現われた。

「さらに、《切り込み隊長》の効果発動！手札から《格闘戦士アルティメーター》を特殊召喚する」

中年の戦士が剣を振りかざすと突如砂嵐がおきその中から丸腰の戦士が現われた。

「そして俺はこの2体のモンスターをオーバーレイ！現われる《アースクエイク・ワイバーン》！」

二体の戦士が光の塊に変わるとゴードンの手の前に突如光の渦が出現、銀河にも見える渦に光の塊が入ると同時に超新星爆発のような輝きがおきた。そして上空に岩石で出来たような体をした腕のない巨竜が二つの光る球体を携え現われた。

『アースクエイク・ワイバーン』 当小説オリジナルカード

効果モンスター

ランク3／地属性／ドラゴン族／攻1900／守1200
レベル3モンスター × 2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材1つを取り除くことで発動できる。フィールド上に表側表示で存在する地属性モンスターの数 × 500 ポイントのダメージを相手に与える。

『アースクエイク・ワイバーン』の効果、オーバーレイユニット

一つを使い地属性モンスターの数×500ポイントのダメージを『
える！くらえ！』

上空の巨竜から放たれる雷の雨がダグバをおそれ。

「ツチ」

ダグバ LP8000 7500

「どうだ」

「ケツ たかが500で何威張つてんだ、初心者かテメエは？」
「調子いいてんのも今のうちだけだぜ、カードを一枚伏せターンエ
ンド」

「なんなんだよ」

このテュエル、虚淵は唯怯えながら見ているしかできなかつた。別
に「コードンのやつた戦術など大して凄くない、ただこのテュエルは
普通ではないのだ。

「カトウ一 神の消失（後書き）

はい、今回から始まつた遊 戲 王Fいかがでしたでしょうか？まだ始めるので「契約者？」とか「HATEつてなんぞや」と思つている方もいますと思ひますがそれはこれから明かしていきたいと思つております。

「カウント2 少年と魔物と愛」（前書き）

前回の話や登場人物の名前など一部他作品のものがありましたが今後もちょくちょく出す予定です。また元ネタとの接点は特にあります。

「ウトウ2 少年と怪物と愛

side 神の目

I2社本社倒壊から3ヶ月後、デュエルモンスターZの関連グッズの製造及び販売権はとある企業に移された。

『KONAMIデジタルエンタテイメント』

これが後の出来事への伏線となつた…

side 虚淵

「…なん…なんだよこれ」

俺は何か悪い夢でもみているのか、

「ハッ どうしたゴキブリ！俺をぶつ殺すんじやなかつたのか ア

ツ

「ぶち殺すだ初心者」

今俺の目の前では、正体不明の白黒の怪物と殺人鬼みたいな顔をした外国人がデュエルをしている。

第一ターン ・ターンプレイヤー・ダグバ ・LP: 7500

・手札・5

「いくぜエ！俺のターンドロー」

「相手のフィールドにのみモンスターがいる時このカードは手札から特殊召喚できる、コイ、《サイバー・ドラゴン》」

人の頭がすっぽり入りくらいの口を持った機械の竜が出現した。

「さらに手札を一枚捨て、《エレクトリック・パンサー》を特殊召喚！」

『《エレクトリック・パンサー》 当小説オリジナルカード

効果モンスター

星5／光属性／獣族／攻2100／守1300

自分フィールド上に光属性モンスターが表側表示で存在しているとき、手札を一枚捨てることで手札から特殊召喚できる。

「そして俺はこの2体のモンスターをオーバーレイ、エクシーズ召喚！コイ、《Adreus, Keeper of Armageddon》」

漆黒の翼を纏つた悪魔が赤い結晶のような短剣を携え現れた。

「Adreusの効果発動！オーバーレイユニットを1つ使い《アースクエイク・ワイヤー》を破壊する」

黒い翼の悪魔が手を翳すと、巨竜の体を黒い煙が包み込みそのまま巨竜ごと消え去った。

「これで邪魔者は消えた、バトル！行けAdreus、タップのフンに攻撃しろ！」

「ツグワ」

「コードン LRP 80000 5400

黒い翼の悪魔が剣を振り、コードンと呼ばれた男を切り刻んだ。

「ターンエンド、どうした？ フン、傷薬が必要か？」

「…クソ…ふう…いや必要ないさ、お前のウジのわいた脳みそを治す薬以外な」

「…図にのんなよ人間」

さつきから漂うこのいやな感じ、周りの奴はなんで動かないんだ、何で俺はこんなとこにいるんだ、くそ、あの時からずっとこうだ。理不尽なことの繰り返しだ。この左腕だって…俺の家族だって…

第三ターン ターンプレイヤー：コードン LRP・540
0 手札：3

「俺のターンドロー…フ…ハハハ、きた」

コードンがなにやら不適な笑みを浮かべている、逆転のカードを引いたのか…

「俺は『ジャンク・フォアード』を特殊召喚、こいつは俺のフイールドにモンスターがいなければ手札から特殊召喚ができる」
全体的に角ばつた人型モンスターが現れた。

「さらに『キヤノン・ソルジャー』を召喚」

機械でできた兵士がダグバへと砲台をむけた。

「そしてリバースカーデオープン、『リビングデッドの呼び声』、墓地の『切り込み隊長』を復活させる、そして俺はレベル3の『切り込み隊長』と『ジャンク・フォアード』をオーバーレイ！ 現れる『インフェルノ・ガイア・モール』！」

『インフェルノ・ガイア・モール』 当小説オリジナルカード

効果モンスター

ランク3／地属性／ドラゴン族／攻2700／守1200
地属性レベル3モンスター×2

自分のモンスターがモンスター1体をリリースして効果を発動する場合、リリースする代わりにこのカードエクシーズ素材1つを取り除く事ができる。

漆黒の体をした巨大な土竜が地面を裂いて現れた。

「ガイア・モール：まさかHATEの」

怪物のようすがおかしい、HATE？さつきから何をいっているんだ？

「バトル、ガイア・モールでAdreusを攻撃、グランド・エクスプローション！」

『Adreus , Keeper of Armageddon』

攻2600

『インフェルノ・ガイア・モール』 攻2700

巨大土竜の口から溶岩のような塊が放たれ黒い悪魔を一瞬で焼き払つた。

「ツウ」

『キヤノン・ソルジャー』 ダイレクトアタック！
「グワ」

ダグバ LP7500 6000

白黒の怪物が膝をついた、だがコードンは間をいれず、「さらに『キヤノン・ソルジャー』の効果発動、モンスター1体をリリースして500ポイントのダメージをお前に与える」

「…フン、だからビリウした。お前のモンスターはたった一体、1000ポイントのダメージくらいどおりのことない」

「1000? おいおいちょっと少なすぎるぜ、ガイア・モールはリ

リースするモンスターを自身のオーバーレイユニットで代用できる。

「…何

「さらに俺は魔法力ード《グランド・チャージ》を発動、墓地の地属性モンスター2体までガイア・モールのオーバーレイ・ユニットにする」

《グランド・チャージ》

通常魔法

自分の墓地の地属性モンスターを二体まで自分フィールド上に表側表示で存在するエクシーズモンスターのしたに重ねる。

「オーバーレイ・ユニットが増えただと」

「いぐぞ、おれは《キヤノン・ソルジャー》とオーバーレイ・ユニット4つをリリース、2500のダメージをくらええええ」

機械の兵士と4つの光の球体が光るオーラのようなものをまとい怪物に迫ってきた… おいちょっとまで、球体の一つが俺の方にも…

「…ぐああああああ」

ダグバ LP6000 3500

「ハハハハハア、どうだこれがHATEのちからだ! 契約者のいな
いお前とは違うんだよお、カードを一枚伏せターンエンド」

「…クソオ…何で…」んな田」

なんか向ひへで「一ーンの高笑いが聴こえた…ウツ…意識が…周りの建物が壊れている…おかしいな…ソコシテレジコハジヤヒトなことはおきないはずなのに…

「ゲホ」

…痛い…脇から血が…ダメだ…視界もぼやけてきた…起き上がるどころか指一本動かせねえ…なんでだよ…ビリヒトヒンなどこで俺は

「ツクソ、やつぱり契約なじじや、ん、あの人間まさか…」
…あの怪物こいつきてる…ほふくぜんしん…怪物もそんなことするのか…クソオなんで俺は
…死ななきやならないんだよ…こんなとこで…かへしゆ…
…

「オイ、立てH ビツヤハリテメHには契約者としての素質があるみたいだ」

「誰だ…契約者…何のことだ

「お前はまだ生きりれる。ボサツトあるな…」

「…お前は」

「俺様か？ダグバだ、これからお前の主になるHATEだ」

「…へ…イト」

「そうだ、説明は終わりだ早くたて」

「けどもう俺は…生きていたつて…」

「そんなこと知るかあ、俺様はこんなところで死にたくない、生きて愛を見る。それまでは死なねえ！」

「愛…か…何を言つてんだよこの怪物は…けど…やつぱつこのまま死んだら…死んでもしにきれないよな…」

「さあ早く立て、そして俺様の名を呼べ！力が手に入る」

…父さん、母さん、ごめん、俺まだそつちにはいけない。生きて…

『この腐った世界をぶつ壊す』

side 神の目

「ダグバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

…。
その瞬間、1人の少年とHATEの物語の幕が切って落とされた

「カトウ少年と怪物と愛（後書き）

ついに一人？がまともな会話をしました遊 戲 王F。これからどんな展開を見せていくのでしょうか。というわけで今回はここで筆をおろすことにします。

「カトウ」 決着と悲鳴と新たな影（前書き）

『テュエル』内容の表記の仕方やキャラの口調が安定しません。

「アウトウ3 決着と悲鳴と新たな影

side 神の目

止まつた世界で二人、いや、1人と1台は会話をしていた。

「あーあ、なんだよあのゴキブリ、デュエル終わる前に死んじまつたよ」

『まだけつかいとけてない、だぐばいきてる』

「そーかいそーかい、つか結構周りの人間巻き込んでしまったなあ、こりや10人前後死んだ奴いるな」

この1人の男の名はゴードン、そしてもう1『台』の名はタップ。信じられない話ではあるがこのタップといわれる存在は熊のような見た目をした怪物である。だが現在はデュエルを行う関係上デュエルディスクへと変貌し声もそのディスクから発せられゴードンはディスクと会話するという第三者から見ればアレな人にしか見えない状態となっている。だがそれ以外にもこの場には目を配るものがあった。

『人』

それも唯の人ではない。全身から血をながした人、手足が明後日の方向を向いた人たちが痛みへの苦痛の声も上げず瓦礫に埋もれるのである。埋もれている人々は紛争地域の少年兵でも軍人でもない、日本で暮らす普通のおばさんや老人ばかりだ。

「しつかし相手が契約前のHATEでラッキーだつたぜ。楽して1体倒せるんだから」

『おれもうれしい、これでまたあいにちかずいた』

こんな凄惨な光景を他所にこの1人と1台はなに食わないかおで話していた。

「さてと、あの『キブリ』をたたき起しすか、サレンダーさせてこの『デュエル』も終わりにす……」

「…………」

ゴードンが言い終わる前に突如凄まじい轟音とともに一本の光が天に向かつて伸びた。

「な、この光まさか契約の……」

『そのまさかだ』

「ツチ、テメエ」

光の中から一人の少年がでてきた、だがゴードンの台詞を遮った声はどう考えても少年の声ではない。

『さあて『デュエル』の続きをしようか、フン』

「この声、さつきの『キブリ』の声、けど一体奴は……ん？あの餓鬼のディスク……まさか」

光の中から出てきたのは先程の『デュエル』の衝撃で吹き飛ばされた片腕の少年、虚淵玄だ。ゴードンは虚淵の左側を見た。するとそこには本來あるはずのない腕が『デュエルディスク』と共にあつたのである。そしてさつき自分が戦つた怪物、ダグバの声もその腕から発せられていた。

「ハ、ハハハ……成る程、テメエそこの餓鬼と契約したというわけか……だが例えそんなことしてもフイールドががら空きの今のテメエに何が出来るん……」

「予言してやるよ、あなたはこの『デュエル』負ける」

「ツア、何のことだ」

「言葉のとおりだ」

「おいおい坊主、あんまり大人をか……」

「負ける……」

「ツチ、この餓鬼！下手にでたら調子こじやがって、ぶつ殺すぞ！」

「！」

それまでくちを閉じていた虚淵が突然くちを開いた。

「…フン、まあいい、とつとと『ティスク』を構えろ、俺は早いとこ帰りたいからな」

第四ターン　・ターンプレイヤー・ダグバ改め虚淵　・L.P.：
3500　・手札：4枚

『いいか、俺様がさつき言つたようにやるんだぞ、今のお前なら必ずそれを引ける』

「わかつてる」

自分の腕もといダグバの声に虚淵冷めた態度で応えた。

「…」

虚淵はデッキの上に手をのせたまま口を閉じた。

side 虚淵

なんだろ?この感じ、こんな不思議な感覚生まれて初めてだ。このデッキの上のカード、見てもいよいに何かわかる、いやわかるんじやない感じるんだ…

「オイ、とつととカードを引けクソ餓鬼！」

このカードによって俺の未来はきまる。ハ、皮肉なもんだなあ、こんなDOREEIの産物に未来を決められるなんて…

side 神の目

「俺のターン!ドロオオオ」

虚淵はついに動いた。自分の持つ野望のために…忌まわしき産物と共に…

「魔法カード、『サイクロン』発動!お前のリバースカードを破壊する」

「ツチ、《天罰》が

文字通りカードから出現したサイクロンがゴードンのリバースカードを飲み込んだ。

「さらに魔法カード《死者蘇生》を発動！その効果により墓地のAdreusを復活させる。

先程倒された黒い翼の悪魔が再びフィールドに現れた。

「そして最後の魔法発動！《ユニット・チャージ》！」

「《ユニット・チャージ》……だと

《ユニット・チャージ》

通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在するエクシーズ素材のないエクシーズモンスター一体と自分の墓地のモンスター一体を選択して発動する。選択したフィールド上のモンスターの下に墓地の選択したモンスターを重ねる。

「Adreusのオーバーレイ・ユニットを一つ復活させる」

「ツチ、ガイア・モールを破壊するきか」

『はあ、そんなありきたりのこと俺様たちがするとおもつてるとか？』

「何？」

「俺はAdreusのオーバーレイ・ユニットを使い手札からこのモンスターを特殊召喚する」

ダグバとゴードンの会話を無視し虚淵は淡々とデュエルを進めていく。すると虚淵の手札の一枚が妙な輝きを放った。ダグバと会話を終えたゴードンはその光にきずいた。その光は自分にも見覚えがあるものだった。

「あの光…まさか…いやでも俺がガイア・モールを生まれた初めて使ったときもあの光が…」

そういうつている間に虚淵の周り段々と不気味な影が覆っていた

「漆黒の闇を支配せし魔王よ、その眼光でセカイを凍てつかせよ」

影がより一層濃く、深くなってきた

「ア……ア……」

ゴーデンは絶対の自信をもっていた。だが目の前の『それ』はそれ以上の不安を植えつけた。一瞬にしてだ。

「来い、『奈落の王 デーモンの召喚』」

彼らのトュエルを眺める人影があった。そこにはこの町をすべて見渡すことの出来る展望台だ。彼らのいるところからは大体800mはなれたところにある。

「おやあ、のことおとおパートナーを見つけたようですねえ」

人影は先程の天に向かつて伸びる光をみていた。

「いやあよかつたよかつた あのこプライドが 無駄 にたかいですからねえ 醜いくせに まるでKONAMIですね わたしの巣窟があつても最後まで生き残れるか心配でしたがその心配はいま

はなさそうですね 」

その人影は誰に語るわけでもなく独り言をただただつぶやいていた。
「でもこれからおもしろくなるでしょうねえ さあ誰が愛を見るの
やら 」

「 … ア … 」

「コードンは睨まれていた……濁つた眼光に…醜悪な赤紫の朽ちた
身体に…強烈な悪臭に…

「こ こいつは…」

「《奈落の王 デーモンの召喚》の効果発動、フィールドにいるモ
ンスターの攻撃力は各自のレベル及びランク×100ポイントアッ
プする」

「何?」

《奈落の王 デーモンの召喚》 攻撃力2500 3200
《A d r e u s , K e e p e r o f A r m a g e d d o n》

攻撃力2600 3100

《インフェルノ・ガイア・モール》 攻撃力2700 3000

《奈落の王 デーモンの召喚》

効果モンスター

レベル7 / 閻属性 / 悪魔族 / 攻2700 / 守2100

このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に表側表示で

存在するエクシーズモンスターのエクシーズ素材1つを取り除くことで特殊召喚できる。このカードは罠カードの効果を受けない。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、フィールド上のモンスターの攻撃力は各々のレベル及びランク×100ポイントアップする。

「ガイア・モールの攻撃力を上回った……だと」

「…バトル、デーモンの召喚でガイア・モールを攻撃、ザ・フォーリング・ワールド！」

デーモンが手を翳すとガイア・モールの体がまるでプレス機かけられたかのようにどんどんつぶれていき爆発した。

「ツク、まさか…ガイア・モー…」

「Adreusで攻撃！」

「グ グアアアアアアアア」

ゴードン LP:5400 2100

ゴードンがAdreusの攻撃をうけくの字をえがきながら後ろに吹っ飛んだ。

「グ ゲホ」

『ハツいいざまだなあ フン』

痛みに苦しむゴードンをダグバはあざ笑った。

「…ターンエンド」

第五ターン … ターンプレイヤー・ゴードン LP:21

00 手札:0

「ゲホッ
俺の…ターン…」

ゴードンは痛みに耐えながらもなんとか立ち上がりカードを引いた

ג' ט' ט'

… ケンオ … この大口にじゅ

「おやお母さんの方には言いかねたが、かわいがな

卷之三

第六ターン · ターンプレイヤー : 虚淵 · LP : 3500

手札 ; 2

• 二〇一九年十一月一日

「…終わつた…のか…」

ああ 終わった

いの間にか虚淵の方勝はなくなり、その隙にはタケルが立てていた

「サツ」と言ひ、首を虚淵はその場に全エネルギーを使ひきったのか倒れこんだ。

[...]

ダグバはその様子を黙つてみているだけだつた。

「う、うああああああああああ、た、助けてくれHHH」「いやだあああ」

突如二つの悲鳴がダグバの耳に入つた。ダグバは悲鳴が聞こえた方向を腕を組み仁王立ちをしながらゆつくり首だけを動かしてみた。するとそこには無数の紫色の手や顔に衣類を引き裂かれ目を潰された全身血まみれのゴーダンと手足を切断されだるまとかしたタップの姿があつた。

やがてどこから現れたのか、無数の紫色の手や顔が肉片とかしたゴーデンとタップを直径5、6mほどの穴に通じてるかもわからない穴に引きずり込んだ。

ダグバ一通り彼らの断末魔をきくと再び虚淵をみた、がそこに別の
人影が突然現れた。

誰だ！」

タケバかとすのきした声で放一と

とずいぶんとちやらけた声がきこえた。

「久しぶりだねえ
ダグバ」

「カトウ」 決着と悲鳴と新たな影（後書き）

ひさしひの投稿となります。すみません、学校の方が忙しくなかなか投稿できませんでした。

ハナトウ4 Road to The New World(前書き)

今日は説明回です。

Hukutow4 Road to The New World

side 神の目

『……昨日、波風第五中学校付近の住宅街で起きた原因不明の爆発に関して警察からは今だ調整中とのコメントしか出されておりません。住民から死傷者をだし……』

テレビのなかで20代後半の女性アナウンサーが淡々と手元の原稿を読んでいる。

「……ン……」

テレビの前にはベッドがありそのベッドには片腕のない一人の少年が横になっていた。

「……ン、ここ……は……」

少年、虚淵玄は目覚めた。

side 虚淵

「……ン、ここ……は……」

「どこなんだここは？それにあの天井…

「知らない、天井だ」

つて、この状況で俺はなにをいつてるんだ。このベッド、この壁、見た感じここは病院みたいだな、つうか何で俺ここにいるんだ、ええっと確かあの時…。

「おやあ おきたみたいだねえ 」

「！？」

「警戒する必要はない、この男は敵じゃない」

おれが声のした方を振り返ると一人の男がいた。

「ああ、自己紹介がまだだつたねえ、ワタクシはアルフレッド・カーン、以後お見知りおきお」

そう名乗ったは自分の横になつているベッドの左隣の椅子に腰掛けている白髪で英國紳士風の格好をし薔薇の装飾が施された黒いシルクハットを手に持つたややぼつちやり体系の中年の男だ。

「しかしあ、英語が通じる子でよかつたよ、そうでないと後々コミュニケーションが取りづらくなるからねえ」

「あなたは…いつたいおれに何のようなんだ？」

あやしい、なんだこの男。

「何のよう…かあ…うーん」「

「ふざけてんのか！」

「あーあそんなおこらないでください、ね」

俺が上半身だけを起こして胸倉を掴むと男はあわてて（人を馬鹿にしたような）謝罪をした。

「くッ」

俺は手をしぶしぶ放した。すると男が胸元をパンパンっとはたくと男は再び口を開いた。

「コホン、ではまず始めに、おめでとうござります、本田から正確には昨日の午後4時44分44秒からですが君も立派なHATEの契約者、という名のパートナーです、これから君にはいくつもの困難が待ち受けているでしょう、そういうこともあって本田はこれから起こる戦いもといゲームのルール説明をしたいと思います」

「…HATE？…ルール、説明？」

「はい、昨日君はそこにいるHATE、ダグバと契約を結びました

ね」

「そこにあるって…」

俺は右斜めの方角を見るとそこには長身の男が壁に寄りかかりながら立っていた。この男が…ダグバ？いやちょっとまで！俺の見たダグバとかいう奴は白黒の怪物だぞ、この中年男の視線の先にはどう見ても革ジャン姿の金髪不良少年しかいないぞ。

「…

「…何だ」

「あ、いやその…お前…本当にダグバなのか?」

「はあ?何いつてんだ、お前?、おれ?…ああそつか、この姿を見せるのはお前には初めてか」

「?…」

俺が頭に疑問符を浮かべていると突如長身の男の周りを光の渦のようなものが囮んだ。そしてその光の渦がまとしても突如として消え去りながら長身男の代わりに白と黒を基準とした怪物が現れた。

「なあ!?、これは」

「さつきの姿は人間社会で活動する上での仮の姿だ。この体じゃかなり不便だからな」

そういうい終えるとダグバ再び不良少年の姿に戻った。

「…

「んふ ではルール説明を始めたいと思います いいかなあ アルフレッドが何かいつてる、ああルール説明かあ。」

「ではまず始めに…君はとあるデュエル大会に強制的に参加してもらいます」

「大会?」

「そう 一体のHATE1人の人間がチームを組み、他のチームを倒しながら最後の一人になるまで戦う、ま、平たく言つとバトルロワイヤルならぬでデュエルロワイヤルです」

「デュエル…ロワイヤル?」

最後の最後になるまで戦う…フィクションじみた台詞だなあ。

「そして、最後に生き残ったチームの人間、すなわち契約者にはパートナーであるHATEと契約を交わした際、最も強く願つたことを叶える事ができます」

願いが叶う…か、なんだかすげえ中二臭いはなしだなあつとあのダグバのデュエルを見る前ならおもつたんだろうなあ、こんなことを何の疑いもなく受け入れてている自分が正直怖い。

「HATEとは彼のよろくな怪物である」とは、だいたい話の内容から理解できると思いますが、HATEには其其そのHATEしか持つていなきカードがあります。特に名称は存在しないのですが…ま、HATEのカードとよんでくれればいいでしょう」

HATEのカード…あのガイア・モールやデーモンのことか…

「そして…HATEと契約者の闘うフィールド結界というものの内部で行われます。この内部で勝たないと勝つたことにはなりません

」

「結界って、俺以外の人が動かなくなつたアレか?」

「はい そしてこの結果いの内部で負けた者は…死にます」

「!?

死ぬつて…オイ冗談だろ、いやでもそつだとしたら

「つてことは、ゴードンは」

「はい お亡くなりになりました」

「…」

この男は嘘などついていない、そんなことはゴードンがここにない理由とダグバの表情を考えれば容易にわかることだ。でも死ぬか。

「随分冷静ですねえ 自分が死ぬかもしれないといつのに」

「…いや、そんなことはない」

アルフレッドはなにか疑いのまなざしを向けたが俺は誤魔化した。

「ま、だいたいオーマカナルールはこんなもんでしょう ご理解いただけましたか」

「…なるほど、大体わかつた」

「そうですかあ それはよかつた」

アルフレッドは満面の（キモい）笑みを浮かべた。

「ただ、2つだけ疑問がある」

「疑問?」

「お前は何者なんだ?そもそもこのデュエルロワイヤルはだれが開いた大会なんだ?」

「ああそれですか それは現時点では教えられないんだよね た
だ教えるべきときにはしっかり教えましょう」

「そうか」

「で、もう一つの疑問は

「もう一つは……ダグバ」

「！？」

俺がダグバに向かつて若干叫ぶ感じで話しかけるとダグバは首だけ動かして若干驚きながらこっちを見た。

「お前は確か契約の時、愛を見る、とかいつてたよな。これからパートナーになる以上それが何なのか話すのが筋なんじゃないのか」

「…」

「オイなんか言つたら…」

「調子に乗るなよ、人間」

「！？」

「俺様はお前を契約者だとは認識しているがパートナーと認識して
るわけじゃねえ、お前は俺様の下僕、下僕が主に指示をしてんじゃ
ねえ、俺様に指示をしていいのは…… ッチ」

ダグバは一瞬なにかを言いかけたがそのまま俺のいる病室を抜け出した。

「何なんだアイツ」

「あんまり気にしないでくでねえ あれが通常運転の状態だから
通常運転？冗談じやない俺はこれからあんな奴と一緒にいなきやな
らないのか。」

「午前8時19分、さてそろそろおいたましましちゃうか」

アルフレッドがポケットから出した懐中時計を見てそういった

「ではワタクシはそろそろ帰ります 治療費などはワタクシが 特別に払つておきました 午後には退院できるので明日からはデュエルに励んでください それだは

「あわかった。ありがとうというのも変だがありがとう」

「いえい…あ！ワタクシとしたことが重要なことをいい忘れていま

した

「何?」

アルフレッドが椅子のしたにあつた自分のバッグをガサゴソと掻き分けているとその中からなにか海外旅行のパンフレットのようなものとりだした。

「突然ですがあなたにはクロフォード連邦のデュエルアカデミアに入学してもらいます」

「...せい?」

ルート4 Road to The New World(後書き)

第4話目です。如何でしたか?

s.i.d.e 神の目

「えーと…あれ? どここつた?」

「こは虚淵の自宅のリビング。自宅とこつても一軒やではなく5階建てのどこにでもある普通のマンションである。現在虚淵はハブラシや衣類など手当たり次第に日用品をリユックサックに詰め込んでいる。

「はあ、なんどこなこと!...」

「ぼやいてる暇があつたらとつと準備しろ」

うなだれる虚淵にじすのきいた声で喋ったのは革ジャンをきたどつかりどつ見てもヤンキーの容姿した男、ダグバだ。

「こたなどこにこいるよつは、クロフォードにいつたほづが早くデュエルロワイヤルに決着をつけることができる。そんなことはわからだるだる!」

「ああ、そうだよ...」

「だつたら文句を言つな

『クロフォード連邦』

デュエルモンスターZを中心発展したいわばデュエルの国である。国内は24のブロックに分かれ、ブロック同士でトーナメントも行うこともある。町の設備や施設もデュエルに関しては、最高レベルの質を誇る。またデュエルだけではなく医療、軍事などの面でも超大国と肩を並べ様々な協力機関が世界のあちこちに存在する。そんなクロフォード連邦に虚淵が行く訳、それは昨日の早朝まで遡る。

とある病院の一角にてベッドに横たわる少年が声を荒げていた。

「お、俺がクロフォードに行くつてどうことだよー!?」

「言葉の通りですよ」

突然のことに戸惑う虚淵の質問に中年男、アルフレッド・カーンは何食わぬ顔でこたえた。

「実を言うとこのデュエルロワイヤル、元々はごく狭い地域で行う予定でしたんですが、こちらの手違いで一部のHATEがその地域から出て行つてしまつたんですよ。それで当初予定されていたデュエルロワイヤル終了日がだいぶ延びてしまつてえ。ははは。ですからこりひしヒワタクシが世界中を飛び回つて出て行つたHATEを回収してきているのですよ。」

虚淵は突然の国内退去命令に戸惑いながらもアルフレッドの話を聴いた。

「そして君の場合、ワタクシがあの子を回収する前にあの子と契約を交わしてしまいました。契約はHATE1体につき一度しか行えず、やり直しもできません。ですので君には嫌でもきてもらいますよ。」

「嫌でもつて…おい何だよそれ!聞いてねえぞ、ふざけんなよ!大体クロフォードって他国とは一切貿易をかわしてないんだろ、そんな国にどうやっていくんだよ!」

虚淵は声を荒げていった。

「ええ それに関しましては大丈夫です 実はワタクシ、クロフォードの上層部にちょっとした知り合いが降りまして、それで」「知り合いで、ねえ」

虚淵は心に何かもやもやしたものを感じながら口を開いた。

「でもちよつとまで、クロフォードは他国との貿易を一切結んでいない、そんな国に行くつて事はつまり、俺は公的には拉致被害者扱いになるんだろう?」

「うーん、まあ確かにそうなりますかねえ」

アルフレッドは少し考へると間のぬけたこえで答えた。

「…」

虚淵はそんなアルフレッドを呆然とみていた。するとアルフレッドが再び口を開いた。

「ですが別にいいじゃないですか」

「どういうことだ？」

虚淵は若干どすのきいた声でアルフレッドを睨みながら呟つた。

「だつて君、あんな『ミたち』といたつて樂しくないでしょ？」「

虚淵がいる病院が一瞬凍りついた。アルフレッドが今までのちやらしい態度から一転したのである。

「君について色々調べてきました」

「！？」

動搖している虚淵をよそにアルフレッドはバッグから何かの資料のよくな紙を取り出した。

「虚淵 玄、3歳と10ヶ月の頃に両親の仕事の都合で渡米、6歳の誕生日、仕事で忙しかった両親が君のために休暇を取り、当時君が大好きだったデュエルモンスターZ、その生みの親、ペガサス・J・クロフォードのサイン会に参加すべく君を連れエコ社へと足を運んだ」「…」「…」

淡々と紙に書かれた文章を読むアルフレッド、何かを呟く虚淵。

「ですが、その日突如謎の爆発事故が起こりエ2社本社は倒壊、その倒壊によつて君の両親は死亡、しかし君は片腕を失うも数少ない

生存者となる」

「や……」

「その後君は日本に戻るも学校のクラスメイトとも馴染めず毎日をただただ抜け殻のようす」

「やめる」

やめろ、虚淵は震える声で確かにそう言つた。しかしながらアルフレッドは喋るのをやめなかつた。

「さらにこれは一部君とは関係ないことですガエ2社倒壊から3ヶ月、つまり、KONAMIという4流企業にデュエルモンスターズのありとあらゆる権利が移つた日を境にデュエルは大きく変わりました」

「……」

虚淵は黙り込んだ、しかし彼の拳にはなにやら赤い液体が流れていった。

「大量のパワーカードもとい壊れカードの急激な増加、明らかにテストプレイを行つていないとしか思えないカード毎の強さ及び裁定、大会の上位を独占する似たり寄つたりなデッキ、調整中やカードが違いますなどと密を舐めた社員共の雑な営業スタイル、あの4流企業に全権利が移つて以降ろくなことがないですね」

「……」

虚淵はだんまりを続けた。

「さらにデュエリストたちもデュエリストたちで、そんな企業の連中を崇拝してカードを買い続ける始末ですからねえ、そして彼らデュエリストはいつしか非デュエリストからこう呼ばれるようになるんですねえ」

「……」

アルフレッドは彼の耳元でこう囁いた。

DORÉ

「その後、反KONMAI派が世界各地でKONMAIやそれを崇拝するDOREIたちに対しテロ行為を働くもあっけなく駆逐 このテロには非デュエリストも含めた無差別テロもあり人々の心中ではデュエルは次第に悪しきものへと変貌していった。その後、デュエル環境の悪化に伴い競技人口のが激減、終にKONMAIのクズどもはお金だけもつてトンズラしてしまいました。しかし今日でもデュエリストと非デュエリストとの対立国家単位で続いておりKONMAIの負の遺産のみが残る現実があるのみで…」

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର ଏବଂ ମହିନେର ପରିଚୟ ।

虚淵はアルフレッドの資料を勢いよくばじき飛はしながら今までの怒りを全て吐き出すように叫んだ。たまたま虚淵のいる病室の前を通りかかった看護婦が不安そうな目でみていたが虚淵とアルフレッドは無視した。

一
ハ
ノ
ハ
ノ
レ

虚淵は息を荒げながらゆづくりとアルフレッドの方に自分の顔を向け彼を睨みながら吐き捨てるよつよつといつた。

「これ以上なにか余計なことをいつたら、ぶつ殺すぞ！！」

二人の間にしばしの間殺氣だつた沈黙が訪れた。二人の会話は英語で行われているがその雰囲気から言葉がわからなくとも病室の前で

は看護婦や他の患者が震えながら虚淵たちの様子をうかがっていた。そしてしばらくすると虚淵が怒りが収まったのか若干息は荒いが落ち着いて喋りだした。

「…わかった、たしかにあんたの言つとおりここにいたって何も変わらない、…だから」

「だから」

虚淵は震える声で、しかしあはりと言つた。

「俺をクロフォードに連れて行け」

「よし、準備OKだ
「チ、いつまで待たせてんだよ」

虚淵がダグバにそう告げると二人は玄関のドアを開け外へ出た。そして自分たちの住む、いや住んでいたマンションから少し離れた公園に向けて歩み始めた。公園の入り口にたどり着くとそこには黒い

スーツを着たボディーガードマンと思われる一人の屈強な体つきの男と、英國紳士風の格好をした中年男、アルフレッドが杖を持つてたつていた。そう、ここは昨日アルフレッドと事前に約束していた自分を拉致する場所である。

「覚悟は、できています、よね」

「ああ」

短い会話を終え、ダグバとアルフレッド、そして虚淵は黒服の男たちに誘導されあらかじめ用意してあつたとおもわれる黒い車に乗つた。

「うふ、これから面白くなりますよ」

「何か言つたか？」

そうダグバがアルフレッドにたずねると何でもないですよ っと返事を返した。

「…」

車が走り出した。虚淵は離れ行く自分の住んでいた町を虚ろな目で眺めていた。

これが虚淵玄の『始まり』であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5140x/>

遊 戲 王F

2011年11月17日18時44分発行